

ダイキン工業株式会社の支援による知床世界自然遺産地域保全事業

2022 年度 活動報告書

1. 多様性に富むしれとこの森を復元する事業

1-1. 100 平方メートル運動の森・トラストおよびその関連事業

「しれとこ 100 平方メートル運動」(斜里町主催)では、開発の危機にあった開拓跡地を買い取り、かつて知床にあった森を復元する取り組みを行っています。1977 年に始まったこの運動は、多くの方々からの支援を受けて開拓跡地の買い取りを完了し、1997 年からはその土地を多様性に富む森へと復元させる取り組みを進めています。

本事業では、第 1 期支援期間(2011~2015 年)に 100 平方メートル運動地(以下、運動地とする)の中央を流れるイワウベツ川流域で行った自然再生の取り組みを発展させ、対象地域を運動地全体に広げて原生の森の復元を進めています。第 2 期支援期間(2016~2024 年)では、知床由来の多様な樹種の苗木を育成して植樹を行います。また、原生の森の復元を進める上で大きな障害となっているエゾシカの食害への対策として、過去に設置した防鹿柵や樹皮保護ネットの補修作業などを行います。その他、開拓後に広がったササ地の森林化や、アカエゾマツ造林地の樹種多様化に向けた作業を行い、開拓以前の森の復元に向けた歩みを進めます。

1-1-1. 針広混交林の復元

昨年度に引き続き、重機を用いたササ地の掻き起こし及び表土戻し作業を行いました(写真 1-1)。一度ササに覆われた場所では、日光をめぐる競争に負けて他の植物が生育することができません。そこで、ササを根ごと掻き起こして衰退させ、新たな木々の更新を促進させる取り組みを行っています。この作業を始めてから 6 年目となる 2022 年度は、岩尾別地区にあるササ地約 0.7 ヘクタールの掻き起こしを行いました。表土を戻す作業については、埋め戻された表土の栄養を元にワラビが繁茂し、樹木の実生への日当たりを阻害している状況が過去に見受けられたため、試験的に表土を戻さない区画を設けました。表土の栄養をなくすことでワラビを減らしつつ、樹木の更新もなされるかを検証する予定です。その他、ササ地の積極的な森林化の取り組みとして、刈払った後のササ地に広葉樹の中型苗を植樹する作業を行いました(写真 1-2)。

ササ地の森林化の取り組み以外にも、エゾシカから森林や苗木を守るために設置している防鹿柵の巡視を行い（写真 1-3、1-4）、倒木などによる破損を発見した際は修繕し柵の維持管理に努めました。

運動地内を流れるイワウベツ川では、かつて生息していたサクラマス等の復元など河川環境の改善に向けた取り組みを行っています。昨年度の本事業で設置し、大雨で半壊した盤ノ川の簡易魚道は、斜里町によるクラウドファンディングを活用して、石組み構造で強化した設計によって修繕を行いました（写真 1-5）。本事業では、魚が魚道を利用しているかを検証するために、電気ショッカーを用いて魚を捕獲する調査を行いました（写真 1-6）。魚道の上流側ではオショロコマの生息は確認されず、下流側からの魚の移動を目指す魚道の重要性が再認識されました。またこの調査で得られたデータは、イワウベツ川本流にある治山ダム改良後の河川環境改善を見極めるための基礎データとしても活かされます。



写真 1-1. 重機を用いたササ地の掻き起こし作業地。赤色塗りつぶしは、表土を戻さない区画（2022年9月12日）



写真 1-2. 刈払ったササ地へ広葉樹中型苗を移植している様子（2022年9月16日）



写真 1-3. 防鹿柵の掛かり木（2022年5月31日）



写真 1-4. 防鹿柵の掛かり木（2023年2月11日）



写真 1-5. 修繕後の盤ノ川簡易魚道
(2022 年 10 月 11 日)



写真 1-6. 電気ショッカーを用いた魚類調査の様子
(2022 年 10 月 11 日)

1-1-2. ダイキン工業社員ボランティアの受け入れ

2022 年度秋（9 月）のダイキン工業知床ボランティアは、新型コロナウイルス感染症拡大のため道外からの参加は自粛となりましたが、道内からダイキン HVAC ソリューション北海道の 2 名にご参加いただき、森林再生作業を実施しました。冬（2 月）のボランティアは予定通り開催されました。なお、本事業ではこれまで 20 回のボランティアを開催し、述べ 207 名の社員の皆さんにご参加いただいています。

1-1-3. 次年度以降の課題と目標

運動地内には、開拓後 40 年以上経ても森林に遷移しない「牧草地・ササ地（未立木地）」が点在しており、この未立木地の森林化が中長期的な課題となっています。そのため、過去 5 年間に本事業を含めて合計 2.5 ヘクタールのササ地の掻き起こしを実施してきました。運動地には未立木地が約 41 ヘクタールあることから、効果的に森林化が進む場所を選択しながら、今後も継続して実施する必要があると考えています。また、順調にササが衰退した場所であってもエゾシカの採食圧は依然高い状況にあり、樹皮保護ネットを巻いた広葉樹中型苗の移植も合わせて実施するなど、さらに効果的な森林化の手法を見出す必要があります。

運動地におけるエゾシカの生息密度は、以前に比べると低くなってきましたが、未だに樹皮食いの被害は確認されており、防鹿柵の維持管理は継続して実施したいと考えています。

本事業の第 1 期支援期間に行ったイワウベツ川流域の河畔林の復元は順調に進んでいますが、河川環境の改善には課題が残されています。最大の課題であるサケ科魚類の遡上を妨げている治山ダム 2 基については、2023 年度にスリット化による改修工事が着工される予定で、工事が完了する数年後には河川環境の改善に大きな進展が期待

されます。今後は、盤ノ川の魚道が適切に機能するよう維持管理しながら、魚類調査による河川環境の評価を元に、最善の取り組みを進めたいと考えています。

2. 世界遺産の価値を守り、伝える事業

2-1. 次世代へ知床の森をつなぐ活動

本事業では、世界自然遺産知床の魅力や価値を次世代に伝えること、更には未来の知床の自然保全分野で必要とされる人材を育てることを目的に、地元の子供たちが参加する自然学習活動を支援しています。

また、地元斜里町および近隣の小学校から高等学校への出張授業や、現地実習等の受け入れを積極的に行い、「しれとこ 100 平方メートル運動」の理解と普及に努めています。また、「しれとこ 100 平方メートル運動」の活動や精神を広く一般のビジターに知っていただくため、知床自然センターで森づくりをトピックとしたレクチャーを実施しています。



写真 2-1. 知床博物館キッズの「川の生き物観察会」の様子



写真 2-2. 羅臼町「知床 KIDS」でのスノーシュートレッキングの様子



写真 2-3. 知床ウトロ学校 4 年生の運動地学習の様子 (2022 年 6 月 3 日)



写真 2-4. 斜里高校 2 年生の森づくり体験学習 (2022 年 10 月 18 日)

2-2. ヒグマと人の共存を手助けする活動

羅臼町で実施している「ヒグマと人の共存を手助けする活動への支援」事業は、第1期（2011～2015年度）から実施されており、第2期（2016～2024年度）が進行中です。

第1期では、人が暮らしを営むエリアにヒグマを侵入させないことを目的とし、町内の北浜～相泊間と中心市街地へ電気柵を設置しました。電気柵の効果を維持するための管理には多大な労力を要しましたが、設置エリアでのヒグマ目撃は減少という大きな成果を得ました。一方で、羅臼町は海岸線沿いに住宅地が広く続いており、全エリアに電気柵を設置することは予算や維持管理の観点から現実的ではありません。そのため、電気柵非設置エリアへの対処法については課題が残りました。

そこで第2期では、第1期に設置した電気柵の維持管理に加え、新たに電気柵非設置エリアに対し、「ヒグマが出没しにくい町づくり」という目標を設定しました。具体的には、住宅地付近のアキタブキ、オオイタドリ、クマイザサ等の草丈の高い藪を刈り払うことにより、見通しが良くヒグマが身を隠せず、餌場や移動経路として利用しづらくし、人の居住エリアにヒグマが侵入しにくくなるような環境とすることを目指しています。



写真 3-1. 電気柵の立ち上げ作業の様子



写真 3-2. 電気柵の立ち上げ作業の様子



写真 3-3. 電気柵への雑草の接触による漏電を回避するための下草刈りの様子



写真 3-4. 電気柵への雑草の接触による漏電を回避するための下草刈りの様子

	
<p>写真 3-5. 地元住民や企業と共同で実施した藪の刈り払い作業の様子</p>	

※画像および文章の無断転用はご遠慮ください。